

よもやま歴史教室

2023

さまざまな歴史を学習することにより、心に栄養を与え、豊かに生きるヒントをみつけていただきたい。
皆様、ぜひご参加ください。

第1回

令和5年

5/20(土)

午後2時～

『日本書紀』の呪縛

—21世紀を迎えた今も、
私たちの中に生き続けている書物の意味とは—

講師 名古屋市立大学特任教授 吉田 一彦先生

よしだ かずひこ



第2回

令和5年

6/17(土)

午後2時～

お釈迦さまの 足跡を訪ねて

—今もって求められるお釈迦さまの教え—

講師 釈尊愛好家
よもやま歴史サークル会員 千種 光雄先生

ちくさ みつお



第3回

令和5年

7/15(土)

午後2時～

齋藤拙堂の 『海防五策』について

—現在にも通じる国防上の考え方を読み解く—

講師 拙堂研究家・文学博士
(拙堂の玄孫) 齋藤 正和先生

さいとう まさかず



【会場】 菰野町庁舎4階会議室

【受講料】 各回200円(高校生以下無料)

■当日受付にて、住所、氏名、連絡先をご記入ください。

各回
詳細は
裏面へ



※講演内容等は、予告なく変更となる場合がございます。
※感染症の拡大状況により、中止となる場合があります。
中止等となる場合は、菰野町役場 HP、防災ラジオ等でお伝えいたします。

【共催】 菰野町よもやま歴史サークル 菰野町(担当課:コミュニティ振興課 TEL 391-1160/FAX 328-5995)

令和5年

5 / 20(土)

午後2時～

講師 名古屋市立大学特任教授
吉田 一彦 先生



『日本書紀』の呪縛

—21世紀を迎えた今も、私たちの中に生き続けている書物の意味とは—

講演要旨

『日本書紀』は、日本最初の国家作成の歴史書として720年に生まれました。この書物は、神話と歴史で構成され、ちょうどこの時代に誕生した(日本国)と(天皇制度)を内外に説明する書物として書かれました。

この講演では、まず『日本書紀』全30巻の概要を述べます。

続けて、『日本書紀』が成立した時代の様相——特に、君主号を「大王」から「天皇」に変更し、唐の政治制度を取り入れて(天皇制度)を構築したこと、それに伴って、王朝名として「日本」という国号を自称するようになったことについて説明します。

さらに、歴史書としての『日本書紀』の特色、その後に及ぼした大きな影響力などについても言及します。

講師紹介

1955年東京都生。上智大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。博士(文学・大阪大学)。名古屋市立大学大学院教授・副学長などを経て、現職。日本古代史・日本仏教史専攻。日本の歴史と文化を語り、古典芸能とジャズを愛す。

主な著書に、『民衆の古代史』(風媒社)、『仏教伝来の研究』(吉川弘文館)、『変貌する聖徳太子』(編著、平凡社)、『『日本書紀』の呪縛』(集英社新書、第5回古代歴史文化賞優秀作品賞受賞)、『日本思想史の可能性』(共著、平凡社)、『日本宗教史1、2、3、6』(共編著、吉川弘文館)、『神仏融合の東アジア史』(編著、名古屋大学出版会)など。

令和5年

6 / 17(土)

午後2時～

講師 釈尊愛好家
よもやま歴史サークル会員
千種 光雄 先生



お釈迦さまの足跡を訪ねて

—今もって求められるお釈迦さまの教え—

講演要旨

2011年、故郷のご院主さんに案内いただき「釈尊聖地巡拝の旅」に出かけました。釈尊すなわちお釈迦さまにゆかりの地、ネパール&インド等を訪ねる旅です。

今までお釈迦さま＝「仏」とのイメージで崇拝してきた訳ですが、そのお釈迦さまの誕生⇒王子期⇒出家⇒苦行⇒覚者(涅槃)⇒初転法輪⇒伝道⇒入滅(大涅槃)までの80年の「足跡」(＝実在)を辿りました。

釈迦族という小さい一部族国家の首長の跡継ぎ(王子)であったシッダールタが、なぜお釈迦さまと呼ばれる「仏」となったのでしょうか。

釈尊の聖地をくまなく巡り、お釈迦さまの時代(紀元前6～5世紀頃)の社会情勢を色んな史料から読み込むことにより知り得た、今もって求められる「お釈迦さまの教え」をお話できればと思っています。

講師紹介

1943年菰野町生まれ。“やんちゃ坊主”の頃、“大日つあん”の築山を駆け登り遊びほうけていたのが「竹成五百羅漢」である。以来“羅漢さん”に興味を持ち、折りに触れて各地の「羅漢堂」を訪ね歩き、これら造立の意趣、目的、現況を調べてきた。そして時宜を得て羅漢さんの“師匠”であるお釈迦さま80年の足跡を辿る機会を得、ゆかりの地、多くの伝道地、実在の証明地を見聞することに依って、2500年前より伝えられている真の教えを理解しようと努めた。

令和5年

7 / 15(土)

午後2時～

講師 拙堂研究家・文学博士
(拙堂の玄孫) 齋藤 正和先生



齋藤拙堂の『海防五策』について

—現在にも通じる国防上の考え方を読み解く—

講演要旨

齋藤拙堂(1797～1865)は今から約二百年前、津藩校有造館督学(学長)のみならず、著名な学者文人として、全国から教えを乞われる人物でした。彼は幕末において武士はどうあるべきか、日本は西洋列強にどう接したらよいかについて、一つの解をもっていたのです。その一つが『海防五策』です。彼は文学者としてだけでなく、世界の地理と歴史についても極めて造詣が深かったのです。この書物で、彼は、日本は四面海に囲まれて、それが国防上いくつかのデメリットになっているとか、外国の文化的侵略が武力侵攻より被害が大きいなど、数々の興味深い説を唱えています。

今日でも決して古くない国防上の、参考となる示唆を与えていると思いますので、現代の状況をふまえながら、拙堂の考え方を解説します。

講師紹介

菰野町在住。昭和5年(1930)に三重県津市に齋藤拙堂の玄孫として生まれる。津中学(旧制)八高(旧制一年)を経て、(新制)神戸大学経済学部へ。昭和28年卒業。四日市倉庫株式会社(現日本トランスシティ株式会社)入社。社員、役員を歴任。平成13年退社後、三重大学大学院、名古屋大学大学院に学び、平成24年(2012)博士(文学)を授与される。齋藤拙堂顕彰会顧問。藤堂藩五日会会員。



～ご来場にあたってのお願い～

■当日受付にて、住所、氏名、連絡先をご記入ください。

【会場】 菰野町庁舎4階会議室

【受講料】 各回200円(高校生以下無料)

【共催】 菰野町よもやま歴史サークル 菰野町(担当課:コミュニティ振興課 TEL 391-1160/FAX 328-5995)